

「人を助ける幸せ」を伝えよう

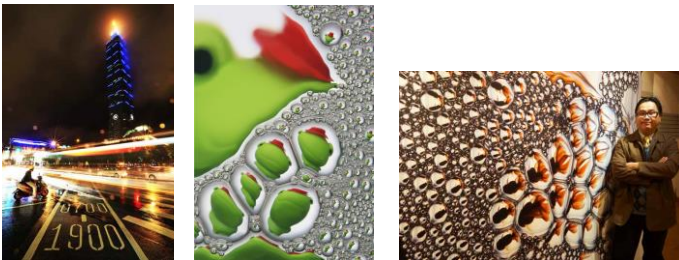
楊玄観 (H16年奨学生、台湾) 台湾芸術大学 副教授

ラブラブ恋の幸せ、美味しい食べ物を食べた時の幸せ、買い物の幸せ、お金持ちの幸せ---。世の中には様々な幸せがあり、人は常に幸せを求めています。ここでは、私が出会った「人を助ける幸せ」について語りたいです。



私は博士を取るため、2002年に来日、千葉大学自然科学研究科に所属しました。当時は生活を維持するため、新聞配達のアパートをやっていました。毎朝3時に起き、大雨や大雪の時には、約250部の新聞を3時間かけて配りました。冬には、指が冷たい風に凍り、バイクが雪で滑ってしまったこともあり、相当きつい仕事でした。そんな大変な時期に、財団から奨学金を受け、瞬時に生活が改善されました。学校の勉強に専念でき、無事に卒業することができました。その時、人に助けられ、困難を乗り越えた幸せを感じ、その幸せと感謝の気持ちから、将来もし自分に力がある時には、人を助けたいと言う志を持つようになりました。

現在、私は台湾芸術大学の図文伝達芸術学科に勤め、ビジュアルデザインと商業写真撮影を教え、デジタル写真創作、アイデア開発デザインに専念しています。主な創作は光、水をモチーフに、美しい光と水の流れを素材として、時間の激しい変化を表現しています。また、水玉の屈折を利用し、形を変形させ、幻想的な世界を作り上げ、様々な世間百態を作り出しています。2012年から、横浜赤レンガ倉庫や台北富士フィルムギャラリーなど、国内外のギャラリーで年一回個展を開き、多くの人々に創作を見ていただきま



図説：光と水をモチーフにした幻想的な世間百態

した。また、2011年から台北撮影専門器材用品年鑑に掲載コラムを依頼され、写真に関する技術や創作手法を執筆し、多くの写真家と経験交流をしています。

その他、学生の国際的な視野を育成するため、海外撮影創作講座を創立し、自分の海外経験を生かし、日本玉川大学、北京印刷学院などの学校と連携し、「巨匠に学ぶ」というプロジェクトを始め、宮崎駿、安藤忠雄など有名なアーティストの創作場所を追い、彼らが創作する際の感動を掴み取り、学生の創作意欲とアイデアの開発力を高めています。



図説：宮崎駿先生の作品『崖の上のポニョ』の創作地：
瀬の浦でのワークショップの様子

これらの仕事をする際、私は常に奨学会から教えられた「人を助ける」と言う心を構え、学生たちが生活に困った時、奨学金やアルバイトを紹介したりして援助をしています。人間関係に悩んだ時も、相談に乗り、問題を分析し、解決方法を探しています。困難がうまく解決した時の学生の笑顔を見ると、自分の心にも喜びがあふれます。「人を助ける」ということは、自分も幸せになることです。

研究にも、お互い助け合いの心を構え、多くの先生方と共同研究や国際プロジェクトを進めながら、自分と仲間たちの研究実績を積み重ねると同時に、人脈や視野を広げています。また、学校の教育発展センターの主任を担任し、新入先生たちに、教育、昇進、研究などの経験を伝え、お互い成長していきます。毎回良い成果が出た時、先生たちの笑顔を見ると自分の努力は価値ありと感じ、再び「人を助ける」と、自分も幸せになることを実感します。

最近注目しているのが戦争や地震、洪水などの災害による難民、子供たちのこと。食糧、医療などが不足する生活状況の中、飢饉、病気は常に子供たちを襲い、より多くの助けを必要としています。ここで、もし余裕がある私たちの一人一人が小さな助けを与えれば、きっと彼らの生活は改善でき、世の中がもっと幸せになるでしょう。

2015年度後期行事予定

- 10月11日(日)： 会館生・家族寮生・奨学生
合同バーベキュー
- 11月11日(水)： 会館生・家族寮生例会
- 11月13日(金)： 奨学生例会
- 12月12日(土)： 年忘れパーティー

- 1月14日(木)： 奨学生例会
- 1月20日(水)： 会館生・家族寮生例会
- 1月29日(金)： 奨学金応募締切
- 2月10日(水)： 奨学生例会(フリー 10:00~17:00)
- 2月17日(水)： 会館生・家族寮生例会
- 3月11日(金)： 奨学生さよならパーティー
- 3月16日(水)： 会館生・家族寮生さよならパーティー

ゲン・フ・ユン（会館生）

ベトナム（クアンガイ）

千葉大 工学研究科人工システム科学専攻
私の日本に来た理由と将来の夢

私は NGUYEN HUU DUNG（ゲンフユン）と申します。ベトナムから来た留学生です。私は 2009 年 3 月に来日し、2 年間日本語学校に通った後、2011 年に千葉大学に入学しました。現在、千葉大学工学部機械工学科の 4 年生に在籍しています。私の将来の夢はベトナムで医療機器の会社を作ることです。

小さいころからテレビでみる日本の風景、きれいに咲いている春の桜並木、黄色や赤色に染まる秋の木々など、日本の四季の景色は南の国に住んでいる私にとって、とても新鮮で、魅力的でした。また、日本の文化であるマンガ、アニメが私は大好きでした。青春時代、ドラえもんやドラゴンボールなどのコミックを友達と貸し借りし、読み更けていました。さらに、身の回りでは多くの日本製品が私たちの生活を支えていました。父は日本の製品を愛しており、いつも日本製のものを買っていました。私が中学校から高校まで愛用していた自転車も日本製でした。現在も、時々母が乗っています。12 年以上家族で使っています。

このような日々の体験から日本という国に興味を持ちました。そして、高校生の時、自分の進路を考える際、日本に留学することを決めました。

大学では機械工学を専攻し、エンジニアを志しました。父の影響で子供のころから、ものをいじったり直したりすることが好きでした。しかし、本当に私を自然科学の世

界に導いてくれたのは高校の物理の先生です。授業はいつも面白かったです。今でも、マッチ一本で、バケツに入っている水をすべて吸い上げる実験を忘れることはできません。そして、私は機械工学科を専攻した理由はもう一つあります。

それは、ベトナムが工業国の仲間入りを目指しており、ベトナム人の生活はまだ不便なところが多いからです。世界で認められている日本の技術を学んで、ベトナムの工業国化に自分の知識を生かし、貢献したいです。そのために、自分の力をさらに磨くべく、来年から千葉大学大学院工学研究科人工システム科学専攻機械系コースに進学します。

日本で生活して 6 年が経ちました。私は毎日とても安心して暮らしています。それができるのは日本人が親切である上に、日本の社会は発展した医療システムで支えられ、とても暮らしやすい社会だからです。ベトナムを含め、その周辺の国々、さらに去年エボラウイルスの感染拡大が続いているアフリカなどでは、医療設備の不足が深刻です。ボストン大学国立新興感染症研究所のパデリア博士によると、「エボラウイルスは空気感染しないので、医療設備が充実している場所では、この病原体の流行のリスクは全く無いと言える」とのことです。私は将来、ベトナムに医療機器の会社を作りたいと考えています。そこでは、より安全で低価格の医療機器を開発し、発展途上国の医療設備の普及に努め、より安心して暮らせる社会づくりに貢献したいです。



趙 理（奨学生）

中国（江蘇省）

千葉大学 工学研究科 デザイン科学専攻
留学生活を経験として自分で成長したと思えること



人生は、絶えず人と、物事との出会いの繰り返しである。縁とは予期しない偶然性であり、そこに、人生の妙味がある。私は日本に来てもうすぐ 2 年が経つ。振り返って見るとそれはあっという間に過ぎた時間であり、その間に私は人生の妙味を味わい、知らず知らずのうちに成長していた。

本当の自分と出会い

中国ではほとんどの若者は一人っ子なので、一人っ子は幼少から両親に頼るのが習慣になりやすい。恥ずかしながら、日本に来る前の私も、何でも両親に頼ってばかりだった。日本での一人暮らしをきっかけに、様々な問題を自分の頭で真剣に考え、未来の道を自分の力で切り抜け始めた。人に頼ってばかりいては、いつまでたっても一人前になれないということに気づいた。

また、日本の穏やかな人間関係の中での暮らしを通して、自分の目標、大切なこと、本当の自分がはっきり分かるようになり始めた。

様々な人との触れ合い

人との繋がりや、世界との「くさり」であり「絆」だと思ふ。留学中、先生や沢山の日本の友人と出会い、楽しくコミュニケーションを取ってきた。日本特有の「他人を思いやる」、「迷惑をかけない」などの考えを「種」と例えらるとしたら、私はそれらをしっかりと心の中に撒き、大切に育てている。また、バイト先のおばちゃんたちや電車中のおじちゃんなど、わずかなつながりであっても、そういったたくさんの方が「頑張って」と言って私を励ましてくれた。そのような言葉を聴くたび、熱いものが胸に込み上げてくるのである。

広大な世界に目を向ける

哲学の世界に、「体験知」という概念がある。約 2 年間に、私は見る、聴く、触る、嗅ぐ、味わうなど五感を総動員して体験を重ねることにより、日本文化に触れ、認識を広げ、深めていくことができた。多様な文化を知るうちに、今の自分の世界の狭さに気づき、さらに大きな世界との触れ合いを求め、自分の世界観や価値観も変わっていった。

今までの留学生活をさかのぼると、多くの人や物事と出会い、様々な体験を積むことで、私は強くなってきた。そして引き続き、明日も明後日も、「人生の妙味」を味わえることを信じて、胸を膨らませている。



蔡 虹 (会館生、中国)

今回、一生忘れられない広島の旅に出かけました。そこで、私たちが見たのは、70年前の強烈な暑さの朝8時頃、原爆の被害に遭った現場でした。この旅は私にとって戦争への反対と人への思いやりについて深く考えさせられる時間でした。

まず、広島市原爆死没者慰霊式、平和祈念式典は猛烈な暑さの中で開かれました。70年前の朝もこのように暑かったことでしょう。思ったよりもたくさんの方が集まり、中には外国人も少なからず見えました。なのに、もし今回のメンバーに選ばれなかったら、自分からは来なかっただろうと思うと恥ずかしくなりました。

次に平和記念資料館では生々しく、痛ましい70年前の状況を感じ取ることができました。その残酷な写真や資料は見るに耐えない程でした。そこで思ったことは、人間なのにどうしてそんなに悪質なことができたのだろうということでした。資料館を回る時の心境は複雑そのものでした。

最後に、私が今回の旅で感じたことは戦争はどんなことがあっても起きてはならないということと、人間だからこそできる思いやりを持つということです。なぜなら「情けは人の為ならず」のように最後は全部自分に戻ってくるからです。



広島平和記念資料館

俞 煥妹 (奨学生、韓国)

被爆70周年になる時に広島の平和祈念式に参加することができました。私は休戦が続いている国で育ってきたので人の理念の違いが呼ぶ戦争の恐ろしさ、残酷さに関しては理解している方だと思っていました。しかし、今まで本や報道でしか知らなかった原子爆弾による被害は考えていたことより残酷なものでした。人の影だけが残っている門、服が肌にくっついて苦しんでいる写真など平和記念資料館の展示品等も長く見ていられませんでした。原爆の規模を試すために広島に爆弾を落とすという話が頭から離れず、その展示品と混ざって吐きそうになり、その場から早く離れました。

戦争を終わらせるためだとしても、このような行為は二度と起こしてはいけない事です。核兵器の被害に関して学んだ我々世代は、後代に平和な世界を譲り渡すために努力していく必要性を強く感じました。「75年間は草木も生えない」と言われた広島は、元気な子供達が生まれ育ち世界の平和を祈っていました。平和のために何かをすることなど考えもしなかった私がすごく恥ずかしくなりました。しかし、今の自分が何をすれば平和に繋がるのかはまだ分かりません。世界各国の利益による争いなど難しいことは置いておいて、今回感じた感情を大事に、私ができることからゆっくり考えて、小さなことから実践していきたいと思えます。

スラメット マイケル スサント (奨学生、インドネシア)

この旅を通じて、色々な事を経験しました。弥山に登って自然の偉大さを改めて実感し、厳島神社の大鳥居を見て人間の技術に感動し、平和祈念式典に参加したり、平和記念資料館を見学したりすることによって、原子爆弾の残酷さや当時の人達が経験した悲惨さが身にしみました。今を一生懸命に生きよう、あのような悲劇を繰り返さないためにも、今の世の中を平和にするためにも、自分が頑張っていこうと思いました。特に、広島平和記念公園に多数飾られている(捧げられている)千羽鶴を見た時は、平和を願う気持ちがさらに強くなった気がしました。しかし、平和記念公園をただの観光地として訪れ、何も考えずにただただ写真を撮るばかりの観光客も居て、少し残念な気持ちにもなりました。

そして、京都を旅して、色んな神社やお寺を訪れて、昔の世界にタイムスリップしたような感じがしました。特に、銀閣寺の日本庭園がとても素敵で感動しました。とても楽しい旅ができて、大変嬉しかったです。



原爆の子の像

孟 吟 (奨学生、中国)

広島に滞在したその2日間で、広島が好きになった。巨大な災難に遭ったところは、ほとんどその上にずっと黒くて、重そうな陰影に包まれているように感じられるが、広島にはなかった。広島の人々はいつも暖かく、優しく心からもてなしてくれた。

特に最近、戦争に関する論争が東アジアの国々の間にまた盛り上がってきた。憲法修正や、日中戦争70周年記念や、アラビア国などの戦争に関する話題が騒々しくなった。母国の中国にも近年戦争を描いたドラマや、番組は物凄く出て来たが、それらを見て、結局敵の残忍さと自らの英勇さしか伝わってこなかった。

「戦争を忘れちゃいけません。」とこれらの情報の発信者が伝えたいメッセージかもしれないが、では、何を覚えておくべきか？

今回広島に行ったのがきっかけで、広島平和記念公園にある「原爆の子の像」のモデルである佐々木禎子のお話を知った。

「原爆の子の像」を見に行った時、そこで多くの人々がスーツケースの中から折り鶴を持ち出して、差し上げている場面と、そこに飾ってある数え切れない折り鶴に感銘を受けた。みんなは佐々木禎子のことを忘れていない。

「1000羽の鶴を折ったら元気になる」と信じていた佐々木禎子の願望を、60年間経ってもみんなに覚えてもらっていて、そして叶えられるように折り続けてもらっている。

戦争を忘れてはいけません。なぜなら、残酷な戦争にさらされた生命の弱みと貴重さを覚えておくべきだ。敵意を覚えていてはいけません。敵意の火炎は燃やしたら、きっといつか再建した町を再び焼き払ってしまうからだ。

会館OB会

鴨川へ！みんな集合

07 v 12 ¥ È?E&• ~
± ÇVÉJvs† ^gK{` €>

花火大会～幕張海岸～



ž ' 1 §

07 v 16 ¥ æ>í | μ | í ± œ | † (>F12 á 0#Ō È ° ¼
Ō) @ ¶ ¥ K <3n \ ' _ ¶ 0¼ K Z C € S | c [í ³ Ñ á
[Ō#Ō 9 † 8 ~ 6x ° " C b È ° ¼ Ō b, ^ Ō#Ō † - | K
Z 8 • Ō " Ō Ū • _ \$ Ō K Z 8 • Q : T

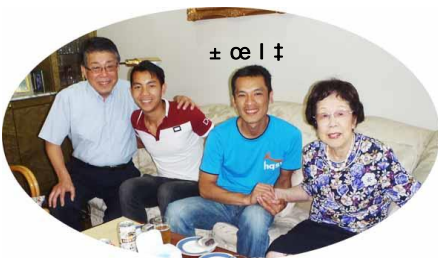
08 v 20 ¥ ý | † &>F16 á 0#Ō ž 4>' @ B | † \ ¶ ¥ K
¶ 0¼ K Z C € S ž 4 b Ō#Ō † 4 € Z b % È Ý ' / œ T Q : T
ž 4 b Ō#Ō _ X 8 Z I Ō W q C O ð K Z C € S

08 v 28 ¥ 5 | 3 d | † Ç " Ñ Ū í @ > & ¶ á 0#Ō p \ >
@ ¶ K K Z C € S Ō G c | | † b \$ Ū = b S u b ¶ ¥
T Q : T | @ á 0#Ō b 8 m # Ō r € S | | † b B 6 x j ~ _
v ¥ b v € † ¶ K S

09 v 9 ¥ • á í Ā á í | " á | † > & ¶ 7 á 0#Ō È ° ¼
Ō >' @ G [¶ ¥ 8 | † Ō b O Z C € S ¥ (Ō ú b p ž
4 \$ \ K Z c - A W Z 8 • Ç b á 0#Ō ð 6 è ² (b G \ † |
C O I < Z C € Z 8 Z ° K ? W S

ý | † μ

í " á | †



± œ | †

07 v > 0 > 5 ¥ 5 , 2 | † > & > F 25 ~ + È
8 Q \ >' @ ! " | † 3 Ā < 3 á 9 K • \ K Z & k
Ç \ ^ W S
/ _ ¼ † X E Z @ † d W Z o K 8

~ E

カレー屋さんで(9月)

07 v 10 ¥ - % ± b • \ Ō#Ō b 50 0 ° 0
Ō ' ¾ _ g • a (Ō _ f S - \$ Ō#Ō b | " †
K) F E } € S < Ā _ ¶ • † Ō I < S
50 0 ° > u [\ : H J 8 r M >

07 v 25 ¥ § Ō á ° Ō | † (>F25 ° á 0#Ō
p \ í Ā Ō á | Ý >' _ 6 x # è 1 # Ō

07 v 28 ¥ Ō - Ū | † > & > F 25 ~ + È Ō á
| Ý >' _ 6 x # è 1 # Ō

08 v 13 ¥ • Ū Ā ¾ Ý | † > & > F 23 ~ + È
p \ í, \$) ~ - ç Ý >' _ 6 x # è 1 # Ō

08 v 23 ¥ - á ð - | † > & > F 18 9 # Ō Ñ Ō
á ð í >' _ 6 x # è 1 # Ō